

大阪府における近年の府立高校改革 特に普通科高校の改編について

The Recent Reform of the Prefectural High School in Osaka Prefecture
: The Reorganization of Particularly in The Ordinary Course of Senior High Schools

稲田 克二¹

要旨

1991年の第14期中央教育審議会答申以後において、大阪府の府立高校改革がどのような理念や手法で進められたかを調査した。特に学校の統廃合や、学科の改編で大きな変化を遂げた普通科高校の状況を中心に、いかなる改革が行われたかを調査・分析し、その結果、府立高校がどのように変貌したかを報告し、その課題や問題点に検討を加えた。

キーワード：高校改革、教育改革プログラム、特色づくり、再編整備、統廃合

high school reform, Educational reform programs, making of the characteristics of

high schools, reorganization and maintenance, integration and abolition

はじめに

1991（平成3）年に第14期中央教育審議会答申により出された「新しい時代に対応する教育制度の改革について」に基づいて、全国の都道府県教育委員会による高等学校改革が始められ、従来の高校学校にはなかった新たなタイプの専門高校、専門学科、総合学科、単位制高校など、多様で大幅な改革が進められてきた。これら一連の高校改革についての論述は、多方面で多数なされているが、大阪府に関しての研究は、辻（2009）¹⁾の研究以外あまり行われていない。

そこで本稿では、1991（平成3）年の第14期中央教育審議会答申以後、大阪府において府立高校改革がどのような理念や手法で進められたかを調査した。特に学校の統廃合や、学科の改編で大きな変化を遂げた普通科高校の状況を中心に、いかなる改革が行われたかを調査・分析し、その結果、府立高校がどのように変貌したかを報告し、その課題や問題点に検討を加えた。

1 1998（平成10）年までの府立高校の状況

大阪府の高校改革は、1996（平成8）年頃までは、

その当時の国際化や科学技術・情報化の進展などの状況を踏まえて、理数科・国際教養科・総合学科などの、普通科以外の新しい学科やコースなどが設置されていたが、これらは部分的な改革であり²⁾、これらの改革以外では、従来からの普通科高校、工業高校、農業高校、定時制高校などについては、大きな改革は進められていなかった。

また通学区制度については、大阪府全域を9つの学区に分け³⁾、普通科高校の志願者は自らの居住地が属する学区内の高校しか受験できない形式がとられ、学区外への受験は専門学科や職業高校を受験する場合にのみ許可される制度となっていた。

その結果、各学区内ではいわゆる学習塾や受験業者が算定した偏差値による普通科高校の序列化が行われ、高位に位置付けされた高校では、難関大学入試で大量の合格者を出し、ほとんどの生徒が4年制大学へ進学する一方、低位に位置付けされた高校では、中途退学・進路変更などの学習上の課題や、生活指導上の課題など困難な問題が山積する状況があった。

さらに、この偏差値による高校の序列化はほぼ固定的であり、旧制中学校・女学校から続く歴史の長い高校や、昭和30年代後半に設置された高校が、順位付けの上位や中位を占め、1973（昭和48）

1 Katsuji INADA 千里金蘭大学 生活科学部 食物栄養学科

受理日：2016年9月10日

年以降に第2次ベビーブームの生徒急増期対策として設置された、いわゆる新設校はそれに続く形となった。そして新設校の中でも、特に交通機関に恵まれず、通学が不便な場所に設置された高校が、困難を多く抱える学校となる傾向が、ほとんどの学区で見られた。そして特段の理由が無い限り、この学区内での高校の序列の変動がほとんどない状況が長年続き、いわゆる「トップ校」、「中堅校」、「困難校」と言われるような学校の序列化が明瞭となり、大阪府の高校教育にとって、改善すべき最も重要な課題の1つとなっていた。

この状況の解決と、大阪府の財政再建からの視点に立った、生徒数減少による高校の適正規模・配置の観点などから、大阪府立高校の改革が行われることとなった。

2 『教育改革プログラム』

上記に示した状況の中で、大阪府の財政再建をめざす「大阪府財政再建プログラム」をもとに、1999(平成11)年4月に大阪府教育委員会により『教育改革プログラム』⁴⁾が策定され、本格的な高校改革が開始された。

この『教育改革プログラム』では、府立高校の現状と課題として、

①1987(昭和62)年度のピーク時には約140,000人であった生徒数が、1998(平成10)年度には約88,000人と、ピーク時の60.1%に減少し、さらに2008(平成20)年度には7万人を割ると予想され、これによる高校の小規模化がもたらす学校運営上の様々な課題への対応や、施設の有効活用をめざすこと。

②大阪府内の高校進学率が約96%になり、高校に進学してくる生徒の学力や進路希望が多様化し、生徒の中には、基礎的な学力や基本的な生活習慣が身につけていない生徒が少なからず存在する実態や、何となく進学したり、仕方なく学校を選択したなどの「不本意入学」などの実態があり、その結果、「進路変更」や「学業不適応」などによる中途退学者が増加しており、中学校の進路指導や高校での学習指導への対応が課題となっていること。

③普通科に在籍する生徒の比率が、1989(平成元)年度の86.6%をピークに、それ以後は減少傾向にある一方、特色ある理数科・国際教養科や総合学科に在籍する生徒の比率が徐々に高まっていること。

さらに、1998(平成10)年度普通科の志願倍率は1.15倍程度であるが、理数科・国際教養科や総合学科などの志願倍率は2倍以上と高くなっており、またこれらの学科に学ぶ生徒の多くは、明確な目的意識をもって進学し、意欲的に学んでいる状況がある。このように、今後は生徒の多様なニーズに対応して、適切な学校選択がなされるよう府立高校の特色づくりを推進することが求められていること。

④職業学科に関しては、生徒の実態が多様化し、卒業後の進路状況では1989(平成元)年度には、就職した者の比率が85.6%であったものが、1997(平成9)年度には68.1%と減少する一方、大学進学者が8.3%、専門学校進学者が15.5%に増加している。

また中途退学率が1997(平成9)年度には6.4%(普通科は2.7%)となっており、職業学科への適切な対応が求められていること。

などがあげられている。

そこで、これらの課題を解決するため、1999(平成11)年、全日制普通科を中心とした『全日制府立高等学校特色づくり・再編整備計画』⁵⁾が策定され、生徒減少期を教育環境・教育条件などの教育の質的向上を図る好機ととらえ、府立高校の特色づくりとあわせて、適正な高校の配置の観点から、普通科高校の再編整備を推進する高校改革が、2008(平成20)年までの10年間にわたりすすめられることとなった。

また途中の2003(平成15)年には、『全日制府立高等学校特色づくり・再編整備計画』を修正した『府立高等学校特色づくり・再編整備計画(全体計画)』を策定し、普通科高校以外の専門高校や定時制課程なども含めた改革が進められることとなった。

この『教育改革プログラム』の目指すところは、

①生徒数減少による学校の人的・経済的運用を効率的に行うために学校数を減らす。その方法として、学校改編の手法を用いて、学校の統廃合を行い、生徒数の実態に合った学校数とする。

②高校進学率の向上により、多様な生徒が入学し、そこから派生する「不本意入学」による「進路変更」や「学業不適応」などによる中途退学者の増加になどにより、日常的教育課題が多い「教育困難校」を解消する。

③時代の要請として生まれてきて、中学生の志望者が多い、理数科・国際教養科や総合学科などの特色ある学科を多く設定する。

以上のようにまとめられる。

3 『府立高等学校特色づくり・再編整備計画』の内容

上記の視点に立ち、この計画では主に普通科高校を対象に、従来の府立高校には無かった新しいタイプの高校・専門学科を創設することや、既に円滑な学校運営が行われ、志願者も一定確保されている総合学科高校に転換するなどの改革が行われることとなった。その際取られた手法は、近隣の2校の普通科高校を統廃合する方法や、単独で改編する方法で改革が大規模に行われた。また工業高校や定時制高校の改編も同時に進められた。

その結果、大阪府の高校の状況は、質、量とも大幅に様変わりすることとなった。

そこで、ここではこの計画で設定された新しい高校の特色について述べる。

①「普通科総合選択制高校」

この高校は、従来大阪府には設置されていなかった新しいタイプの高校であり、全国的に見ても他の都道府県でも行われていない、大阪府教育委員会が独自に設定したもので、その特色は以下の様に示された⁶⁾。

- ア) 基礎学力を重視しながら、生徒一人ひとりの興味・関心にあった学習を通して、進路実現の力を育む。
- イ) ある程度まとまりをもった内容に関する「エリア」を設け、生徒は入学後に自分の興味・関心・進路希望にあった「エリア」を選択し、学習の助けとする。
- ウ) 従来の普通科科目に加え、情報・福祉・国際理解・芸術などの専門科目も選択できるよう、多様な科目を開設する。
- エ) 開設科目には、生徒全員が共通に学ぶ共通履修科目のほか、選択履修科目として、一つの領域について、ある程度まとまりをもった内容の学習を進める「エリア指定科目」と、生徒の興味・関心や進路希望に応じて選択できる「自由選択科目」を用意する。
- オ) 「エリア」は、特定の内容を、専門性に重点的に置いて、深めていくものではなく、生徒の興味・関心や進路の動機付け、入門といった性格付けのものとする。
- カ) 「エリア指定科目」と「自由選択科目」の組み合わせにより、一つの領域について深く学習したり、幅広い領域にわたって学習するなど、生徒の希望に対応できる教育課程

を工夫する。

ク) 地域の特性を生かした特色ある教育活動を展開できるよう工夫する。

となっており、共通履修科目を60～80単位程度、エリア指定科目を8～12単位、自由選択科目を20～30単位履修する教育課程を設定している。

この高校は、次に示す総合学科高校に類似した教育課程を設定しているが、総合学科高校ほど踏み込んだ内容にはなっておらず、あくまでも普通科を基本としていながら、多様な生徒に対応できるよう普通科を部分修正した学科である。

②「総合学科高校」

この高校は、大阪府教育委員会が独自でプランを策定したものではなく、普通科でも専門学科でもない「第3の学科」として、文部科学省が主導して、全国に数多く設置された高校の類型である⁷⁾。

その特色は1年次では、普通科高校とほぼ同じ必修履修科目を28単位履修させ、2年次では、必修履修科目は10～12単位程度とし、残りの16～20単位を選択科目に、さらに3年次では、必修履修科目は4～6単位程度とし、残りの22～25単位を選択科目に配当している。その結果、3年間での総履修単位数は、90～99単位となっているが、そのうち、40～43単位程度を選択科目としている。このように、選択科目の単位数が多いことが、総合学科高校の大きな特色となっている。

さらにこの総合学科高校では、学校・生徒や地域の実態に応じた特色ある教育課程が編成できるよう、「学校設定科目」を自由に設定することができ、各学校で多様な「学校設定科目」が設けられていることも、大きな特色となっている。

さらに他の学科にはない必修履修科目として、生徒が進路設計を考え、種々の職業体験や大学見学などをする新しい科目である「産業社会と人間」や、生徒が自らテーマを設定し、それについて資料蒐集、分析、まとめを行う「課題研究」が設定されているのも、特徴となっている。

③「全日制単位制高校」

この高校は、基本的には全日制普通科高校であるが、学年による教育課程の区分を設けず、所定の単位を修得すれば卒業できるシステムを持ち、生徒自らが主体的に選択した学習計画に基づいて学ぶことができる高校であり、大学の単位履修制度と類似するシステムをもつ高校ある。

この場合も選択科目を多数設定し、それぞれの興味・関心・進路に応じて科目を選択して学習し、

3年間で一定の単位を修得すれば卒業できるもので、共通履修科目を40~50単位程度、選択科目を40~50単位程度を履修する制度をとっている。

④「多部制単位制高校」(クリエイティブスクール)

この高校は従来の定時制のシステムを改良し、午前、午後、夜間の授業時間帯の中で、3年または4年の期間に学び、5~6程度の系列を設け、共通履修科目、総合選択科目・自由選択科目を履修する3部制の高校で、単位制の昼間の学校でありながら、定時制の課程の制度を活用した、生徒自らが学ぶ時間帯や科目を選択できる高校である。授業時間帯や履修科目が生徒の希望や関心にあわせて柔軟に選択でき、一斉教育になじまない生徒にも対応できるシステムを持っている。

⑤国際・科学高校

この高校は国際化・情報化の進展に対応し、豊かな国際感覚や確かな国際理解の下に、科学技術、経済、文化などの分野において、グローバルに活躍できる人材の基礎となる資質・能力の育成を目指すため、海外との交流や実験・実習を重視した授業展開などに特色を有する高校である。従前に普通科高校に併置して、国際教養科を持っていた高校が対象となった。

⑥「工科高校」

この高校は、従来の工業高校を改編し、専門分野の深化と高度な専門性を身に付けるための高等教育機関への接続を目指し、入学者選抜では、「機械科」「電気科」といった小学科ごとではなく、「工業科」という大学科で選抜を行い、1年次に工業の基礎を学び、2年次から専門分野を幅広く学ぶとともに、知識・技術・技能の深化を図ることを特色とする高校である。

以上のような新しいタイプの高校を作る『府立高等学校特色づくり・再編整備計画』の概略をまとめると、

- ①基本的な部分は、従来の普通科高校の教育課程を踏襲する。
- ②生徒の興味・関心・進路に対応できるよう選択科目を大幅に増やす。
- ③学習内容をまとめた「エリア」「系列」などのコースや類型を設置する。
- ④「国際化」「自然科学」などの、特定の目的に特化した特色のある学科を設置する。
- ⑤学年制や学習時間帯を柔軟にして、多様な生徒の希望に対応する。
- ⑥工業高校についても、生徒の実態に合わせて、

適切に改革する。

ものとなっている。

これに従って、普通科高校を中心とした改編が、年次ごとに数校を対象として行われた。その際取られた手法は、1校を単独で改編する場合と、学校数を減らす当初の目的に対応するため、隣接する2校の普通科高校を統廃合する手法が、ほぼ同数採用された。

その結果、特に統廃合となる学校の生徒・保護者・地域・教職員への説明と納得を得ることにに関して、いくつかの問題を発生させながらも、ほぼ計画通りにすすめられた。

この計画がすすめられた結果、1999(平成11)年度に全日制155校、定時制・通信制30校 合計185校あった府立高校数は、2008(平成20)年度には、「昼間の学校」138校、夜間定時制・通信制16校合わせて154校となり、『教育改革プログラム』の第1の課題であった、生徒数減少による高校の小規模化がもたらす学校運営上の様々な課題への対応や、施設の有効活用をめざすという高校の適正規模・適正配置が達成された。

4 『府立高等学校特色づくり・再編整備計画』の総括

1999(平成11)年度から始められた『府立高等学校特色づくり・再編整備計画』は2008(平成20)年度に終了し、一定の目的が達成された。

そこで大阪府教育委員会は、『府立高等学校特色づくり・再編整備計画』の検証作業を行い、2008(平成20)年1月に『「府立高等学校特色づくり・再編整備計画」にもとづく高校改革の進捗並びに検証状況について』⁸⁾を発表し、次のような総括を行った。

成果として、「特色づくりと教育環境の整備に取り組んだ結果、中学生の高校進学の実選択肢が拡大し、「入りたい学校」という観点で進路選択ができるようになった。」

また、「目的意識をもって入学し、生き生きと学ぶ生徒が増え、高校が活性化し学校の教育力も向上した」とまとめた。

個別の観点からは、ア) 中学生の進路選択の充実と拡大 イ) 学習指導の充実 ウ) 学校の活性化 エ) 学校の授業力・教育力の向上 オ) 施設・設備面の教育環境の整備 カ) 『特色づくり・再編整備計画』の実施による府立高校全体への影響。

以上の6点について成果が出たとしている。

次に課題として、『府立高等学校特色づくり・再編整備計画』は順調に進み、定着しつつあるが、特色づくりの定着・発展のために広報活動を継続し的確な情報発信に努めるとともに、改革校に対しては、学校タイプ別に状況を見極めながら、引き続き支援と指導・助言を行うこと。

また入学者選抜制度についての研究や、府立高校全体の活性化に向けた取り組みも必要であるとした。

そして個別の課題としては、ア) 特色づくりの定着・発展に向けての支援と指導・助言 イ) 広報活動の継続・工夫 ウ) 制度の定着 オ) 特色づくり・再編整備の成果の共有化 の4点をあげている。

5 『府立高等学校特色づくり・再編整備計画』の分析と課題

1999（平成11）年以来10年にわたって行われた『府立高等学校特色づくり・再編整備計画』は、かつての大阪府教育委員会では行われたことのない、大きな高校改革であった。

これに関して、筆者は普通科総合選択制高校、総合学科高校には校長として、進学指導特色校には教頭として、国際教養科併設校には教諭として勤務し、大阪府教育委員会の一連の学校改革を直接高校現場で担当してきた。

そこでこれらの各学校で改革に関して得た経験や知見をもとに、『府立高等学校特色づくり・再編整備計画』に分析を加え、「成果」と「課題」を検討してみる。

「成果」としては

（1）この計画の大きな目標であった「入れる学校」から「入りたい学校」への変革 という観点に関して、各校の特色づくりを理解して志望校を選択して入学する目的意識の高い生徒が増えた。

この点について、さらに詳細に検討を加えると以下ようになる。

- ①高い意欲・意識の生徒が増えたことにより、学校内に活力が生まれ、授業・部活動・学校行事などが活性化した。また校則違反などの生徒指導上の件数が減少した。さらに不本意入学が減少し、不登校や引きこもりも減少した。
- ②系列・エリア・系などの特色ある教育内容が、生徒の興味・関心・進路希望に合致し、教育

活動が活性化した。

- ③意欲的な生徒が増えたことにより、教師が「教える喜び」を実感し、指導力が向上した。

- ④就職に関しても、求人企業からの認識が向上した。

- ⑤地域社会からも、学校の変革が認められるようになった。

（2）選択科目が多数設定されたため、多様な生徒の興味・関心・進路希望に対応できるようになった。この点に関して詳細に検討すると以下ようになる。

- ①自分が学びたい科目を選択できるため、生徒の学習への姿勢が良好となった。

- ②教師にとって、自分が教えたい科目を担当したり、自分が教えたい科目を「学校設定科目」として開講できたため、教師の学習指導への意欲や、指導力が向上した。またそれに応える意欲的な生徒が増えたため、教師の授業への意識変革が進んだ。

- ③数多く開講された選択科目の選択方法の指導などを通じて、自分の将来を考える「キャリア教育」が推進された。また総合学科では「産業社会と人間」が、その他の改革校では「総合的な学習の時間」が、本来の趣旨に沿って熱心に行われたため、それらの目的や内容を指導する「ガイダンス」活動を通じて、教師と生徒との関係が密接になり、生徒との望ましい関係が深まり、教師と生徒との良好な人間関係が形成された。

（3）新しい学科や教育課程などの特色を中学校の生徒・保護者・教職員に周知するための活動が活発になり、開かれた高校づくりが推進された。この点について、詳細に検討すると以下ようになる。

- ①ホームページの充実や定期的な学校訪問・学校説明会などの広報活動を通じて、中学校や中学生との接触が増えたことにより、高校側に閉鎖的な気風を改善しようとする意識の変革が生まれた。

- ②高校側に、改革のシステムや特徴、他の特色ある高校との違いや優れている点を取り上げ、それをパンフレットやホームページを活用してアピールする行為ができるようになった。

- ③中学校側から、学校が変革され、従来とは異なる高校になったことが、認識されるようになった。

(4) 進学希望の生徒が増加したことや、ガイダンスの機能を増やしたこと、「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」などで進路探究や大学研究などに積極的に取り組んだ結果、大学との接触が増え、高大連携が進展した。

(5) 系列・エリア・系などの特色ある教育内容を進めるため、新教室が作られたり、古い普通教室や実験室、実習室、視聴覚教室、特別教室、体育館、運動施設などが改修され、また教具やコンピュータの入れ替え・増設がなされるなど、施設・設備の改善が進み、教育環境が大幅に良好となった。

(6) 入学者選抜に関して、改編を理解し、魅力を感じて「入りたい学校」を志願する生徒が増加した。

一方「課題」としては、

(1) 『教育改革プログラム』そのものの府民、中学校、地域社会や高校の教職員への周知が不十分であったため、その趣旨の理解が進みにくい場合があった。

(2) 改編・改革校の選定理由が不明確であったため、対象校の生徒・保護者・同窓会・地域社会や当該校の教職員の理解が円滑に進まない場合があった。

(3) 改編が急速で大規模であったため、中学生・その保護者や中学校の理解が追いつかず、中学校側の進路指導の負担が増加し、進路指導が十分に行えない場合があった。

(4) 志願者数が増えたことに関しては、改革対象になった学校の入学者選抜が、他の普通科高校に先立って2月に行われる前期入試に設定されたため、「入りたい学校」を選択したのではなく、「早い時期に入学を決めたい」生徒が多数受験しただけで、特色に魅力を感じて受験した生徒が中心ではなかったと考えられる場合もあった。改編校の志願者数が増加したのは、この入学者選抜の制度によるところが大きいとも考えられる。

この影響を受け、従来どおり3月に入学者選抜を行っていた改編対象校以外の普通科高校では、志願者が減少したり、志願者の学力が低下するなどの影響を受けた場合があった。

(5) 選択科目が多数設定された結果、普通科高校の授業として適切とは考えにくい科目などが作られ、「文化教室」「カルチャーセンター」の

ようになった場合があった。

また生徒の選択科目の決定方法において、自らの人生設計に基づいて積極的に選択科目を履修する生徒もいたが、教科書を使用し定期試験が行われる科目よりも、負担が軽く、定期試験が行われない実技・実習科目を安易に選択する生徒が出てくる場合も多々あった。

(6) やみくもに選択科目を増やしたため、教材作成の時間や労力、担当教科数の増加による教師の負担増が出てくる場合が多々あった。また、それにより、教員の生徒とのかかわりや学校行事、部活動指導などでの接触時間が十分に取れなくなった場合があった。

(7) 改編対象校内で、膨大な改編作業を遂行していくための新たな組織編成や、会議の回数や時間が増え、学校全体の負担が大きくなった場合があった。

(8) 改編対象校の教職員の学校改革、制度改革に対する意識・意欲に差があり、改革に積極的な教職員と消極的な教職員との間に齟齬が生まれ、改編作業が円滑に進まない場合があった。

また、改編作業が完成した後に改編校に異動してきた教職員に関して、一連の高校改革の趣旨の理解に差があり、赴任後における教育活動への意識・意欲にも高低差がある場合があった。

さらに改編の趣旨を理解し、改編の中心となった教員が異動した後は、改編の速度や内容が低下する場合があった。

(9) 改編の主流となった、大阪府教育委員会が独自に設定した普通科総合選択制高校のシステムは、文部科学省主導の総合学科高校の制度に近似しているが、財政的・人的支援が総合学科高校ほど潤沢ではなかったことなどから、その目的が十分に達成できず、中途半端な状態になった場合があった。

その結果2009(平成21)年1月に策定された、『「大阪の教育力」向上プラン～公立学校教育への信頼の確立に向けて～⁹⁾』では、普通科総合選択制高校は再度改編されることとなった。

(10) 改編の対象とならなかった従来の普通科高校では、十分な財政的・人的支援など制度改編の恩典が得られない中で、「特色づくり」が求められた。

以上の様にこの改革は、大きな成果を上げることができたが、困難な課題も内包したままです。

られ、2008（平成20）年度に当初の計画通り終了した。

その後、前述の『「府立高等学校特色づくり・再編整備計画」にもとづく高校改革の進捗並びに検証状況について』に基づいて、大阪府教育委員会は、『府立高等学校特色づくり・再編整備計画』の後継の施策として、2009（平成21）年1月に『「大阪の教育力」向上プラン～公立学校教育への信頼の確立に向けて～』を制定し、新たな高等改革を始めることとなった。

文献

- 1) 辻 郁雄. (2009). 大阪府立高校の改革—主として職業指導の観点から— 大阪産業大学論集人文・社会科編,5,139-162
- 2) 理数科は天王寺高校、大手前高校に、国際教養科は箕面高校、千里高校、旭高校、枚方高校、住吉高校、花園高校、長野高校、泉北高校、佐野高校の各高校の普通科に併設され、今宮高校、柴島高校、松原高校が総合学科高校に改編されていた。
- 3) 2007(平成19)年には4学区に改正され、2014(平成26)年から学区は廃止された。
- 4) 大阪府教育委員会. (1999). 『教育改革プログラム』
- 5) 大阪府教育委員会. (1999). 『全日制府立高等学校特色づくり・再編整備計画』
- 6) 拙稿 (2006). 大阪府立高等学校普通科総合選択制における地理関連科目の現状と課題. 新地理,54-2,22-23
- 7) 総合学科高校は、文部科学省の教育施策であったため、予算や教員定数加配などで優遇された。
- 8) 大阪府教育委員会. (2008). 『「府立高等学校特色づくり・再編整備計画」にもとづく高校改革の進捗並びに検証状況について』
- 9) 大阪府教育委員会. (2009). 『「大阪の教育力」向上プラン～公立学校教育への信頼の確立に向けて～』

再編・統合された大阪府立高等学校 2001(平成13)年～2009(平成21)年

	普通科総合選択制	総合学科	全日制普通科単位制	多部制単位制	専門高校
2001(平成13)年	福井高校 (単独改編) 門真なみはや高校 (単独改編)	枚岡樟風高校 (玉川高校と食品産業 高校の統廃合)	長吉高校 (単独改編)		
2002(平成14)年	八尾翠翔高校 (八尾東高校と八尾南 高校の統廃合) 日根野高校 (単独改編)	芦間高校 (守口高校と守口北高 校の統廃合) 堺東高校 (単独改編)			
2003(平成15)年	豊島高校 (単独改編) 西成高校 (単独改編) 成美高校 (上神谷高校と美木多 高校の統廃合)	八尾北高校 (単独改編)	槻の木高校 (島上高校と高槻南高 校の統廃合)	咲州高校 (住之江高校からの改 編)	港南造形高校 (総合造形科) (単独改編)
2004(平成16)年	大正高校 (単独改編) 枚方なぎさ高校 (枚方西高校と磯島高 校の統廃合) かわち野高校 (加納高校と盾津高校 の統廃合) 金剛高校 (単独改編) 伯太高校 (単独改編)	能勢高校 (単独改編) 貝塚高校 (単独改編)			
2005(平成17)年				箕面東高校 (単独改編) 桃谷高校 (単独改編) 成城高校 (成城工業高校を改編) 東住吉総合高校 (東住吉工業高校を改編) 和泉総合高校 (和泉工業高校を改編)	茨木工科高校 (茨木工業高校を改編) 西野田工科高校 (西野田工業高校から改編) 淀川工科高校 (淀川工業高校から改編) 今宮工科高校 (今宮工業高校から改編) 城東工科高校 (城東工業高校から改編) 布施工科高校 (布施工業高校から改編) 藤井寺工科高校 (藤井寺工業高校から改編) 堺工科高校 (堺工業高校から改編) 佐野工科高校 (佐野工業高校から改編) 千里高校 (国際・科学高校) (単独改編) 住吉高校 (国際・科学高校) (単独改編) 泉北高校 (国際・科学高校) (単独改編)
2006(平成18)年	緑風冠高校 (南寝屋川高校と大東 高校の統廃合)				
2007(平成19)年	北摂つばさ高校 (茨木東高校と鳥飼高 校の統廃合)	千里青雲高校 (東豊中高校と少路高 校の統廃合)			
2008(平成20)年	北かわち阜が丘高校 (東寝屋川高校と四条 畷北高校の統廃合) みどり清朋高校 (池島高校と清友高校 の統廃合)		鳳高校 (単独改編)		
2009(平成21)年	東淀川高校 (単独改編) 懐風館高校 (羽曳野高校と西浦高 校の統廃合) りんくう翔南高校 (泉南高校と砂川高校 の統廃合)		市岡高校 (単独改編)		